

まじろみ

勿忘草

メモリート日本本部。

各地に駐在する者を除くメモリートたちが帰る場所であるそれは、昔ながらな日本家屋の形をしている。

周りにはぐると竹垣に囲まれ、屋根のついた門をくぐってもまだ建物の姿は見えない。砂利道を進んで階段を上り、杉の林を抜け、また一つ門をくぐるとようやく見えてくる。

数十人のメモリートが生活しているだけあり、かなりの邸宅だ。表からは見えないが庭園もあって、これまた広大である。

……まあともかく、日本のとんでもない金持ちの屋敷を想像してもらえとはやい。

そんな日本本部に、一人の青年が近づいていた。

カフェオレ色の肌、蜂蜜色の髪、エメラルドの瞳。

【土】を司る能力者、イブティカル・ハーシウ・ムフタという二十歳の青年である。何の躊躇いもなく屋敷の中に入ると、長い廊下を進んで、いくつもの部屋を通り過ぎ、離れに向かった。途中で何人かの同業者とすれ違い、その度に「お疲れだの「おかえり」だの言われ、軽く笑みを浮かべる。

彼は、任務を終えて帰還してきたのだった。メモリートたちはまず『城主』と呼ばれる屋敷の主に、任務結果の報告をしな

ければならない。

ちなみに『城主』というのは役職である。住んでいるのが屋敷であろうと『城主』と呼ばれ、その国のメモリートたち全てを統括する役目を持つ。つまり偉い人である。社長と言った方がわかりやすいかもしれない。

彼が離れの『月の間』に入ろうとすると、その前にふすまの向こうから二十歳くらいの若い男の声がした。

「おかえりなさい、ブティカくん」

「……ただ今戻りました、『城主』」

ふすまを開けると、縁側に座って庭園を眺めている着物姿の男の背中が見える。ブティカが入って行くと、男が振り向いた。

名は安倍晴燐^{あべのせいらん}。日本本部の『城主』である。

目の辺りで前髪を切りそろえ、後ろもうなじにかかる辺りで短く切っている。そして、瞳は閉じられていた。

「ごめんね、膝の上で如月（猫の名）がひなたぼっこしてるんです。このまま聞いてもいいかな」

正座してうなづくブティカ。そのまま彼は淡々と、今回の任務の成果を述べた。中身は餓鬼という化け物に憑かれた女性を、彼女ごと地の底に封じたというものだった。

「……手遅れでした」

沈痛な面持ちで晴燐がうなずき、ブティカの話が終わるとも

う一度、深くうなずいて言った。

「お疲れ様でした。今回の事件は二度と起こらぬよう、因果関係を詳しく記録します。石を一度貸してもらえませんか」

ブテイカが立ち上がって歩いて行き、ポケットから出した透明な棒状の小石を晴燐に手渡す。ついでに彼の膝の上を見た。

「……太った？」

牛のような模様をした大きな猫が、ギッとブテイカを睨み付ける。晴燐が笑った。このときも、目は閉じられたままだ。

「駄目だよブテイカくん、如月さんは女の子なんですから」

「あ……ごめん、ね？」

にやおう。

数時間経って、来たのはすらつとした双子の兄妹だった。

浅葱色の髪と黄金色の瞳をした二人は、兄をソラ・エヴィリア、妹をサラ・エヴィリアといった。アメリカ人である二人のこの名は無論偽名であるのだが、とある事情があつて、ここではそう呼ばれている。どちらも十八歳だ。

ソラは【風】の能力者、サラは【火】の能力者。ちよつとご機嫌な顔で入ってきたところを見ると、誰かにご馳走してもらったのかもしれない。

英語で晴燐が言った。

「おかえりなさい、ソラくん、サラさん。すみませんが、今度

は葉月（こつちも猫の名）が膝で寝ていてね……」

サラが嬉しそうに晴燐に近寄って行って、猫を見つめる。今度は黒猫だ。兄のソラはというと、それ以上言わずともわかったようで、英語で任務報告を始めた。

双方日本に四年いるので、日本語は大方聞き取れるし、ソラの方はほぼ完璧にしゃべれるのだが、英語の方が漏れなく報告できる。晴燐は日本語だけでなく、英語と中国語はほぼ完璧であるので、こつちの方が正確で手取り早いのだ。

先ほどのブテイカはというと、彼は一種の天才児であるので、日本に来てわずか一年で日本語をマスターしてしまっている。

「……なるほど。それではやはり、あの地域には不穏な空気の流れが見られる、と」

晴燐はつぶやき、ふむ、と口にこぶしを当てた。一部始終を聞いている間も、葉月の爆睡は続いていた。

「対策を考えなきゃね。何はともあれ、長期任務お疲れ様でした。今日はゆっくり休……あ、そうだ」

振り向く晴燐。

「ソラくん、足を怪我しましたか？ 先ほどの歩き方が少々きこちなかったですが」

「はい。足首の骨にヒビが」

……目は閉じられているままだ。晴燐はソラを手招きした。

大人しくソラが晴燐の隣まで行つて、屈みこむ。

「念のため、見せてください。何も感じないから、多分大丈夫だとは思うんだけど」

サラが心配そうに見守る中、ソラがジーンズをまくり上げて、包帯の巻かれた足首を見せた。晴燐は葉月を起こさぬよう、そうとソラの方^うに上体を傾け、目を開く。

彼は盲目なのではない。かなり異様な目をしているのだ。

そうしてそれを見た他人を驚かせないために、意識的に目を閉じている。

「……うん。何もくっついてきてないし、変な色も見えない。はい、いいですよ。今日はゆつくり休んでください」

にこつと笑う晴燐。ソラは「はい」と返事をし、サラはほつと胸をなでおろした後に、うなずいた。

二人が立ち上がると、またすぐ晴燐は目を閉じた。双子が遠ざかっていく足音がする。晴燐は未だに眠っている葉月を二撫でし、ふうと息をついた。

「僕も眠くなってきたな……」

目を開き、庭園にある鹿威しを眺める。もぞり。手の下で葉月が身じろぎをした。

黒目が。彼は、黒目が異様に大きいのだ。

それは尋常な大きさではなく、もはや不気味なほどに巨大で、白目がほとんどない。ただ驚いたことに、視力には何の影響もなく、少し他人より見えるモノの種類が広いだけ。

初めて見た者は恐怖し、悲鳴を上げるときすらある。目を閉じることは力の封印でも何でもない。晴燐の力はその程度で抑えられるものではないし、閉じたところで人ではないモノの存在を感じることは容易だ。

本^{ほん}当に、ただ、誰かを怖がらせないために。

そのために、彼は目を閉ざす。

——数時間後。

ぱたぱたぱた。

「晴燐さん……あれ？ 晴燐さん、いないんですか。松原しずくです。任務報告に参りました。開けますよ」

「あれっ、いるじゃん。晴燐さん、どうしたんですか」
ぱたぱた。

「晴燐さん……あ、」

すごいことになっていた。晴燐の周りには様々な種類の猫が群がっていた。しめて十二匹。

覗き込んだときの晴燐の顔はいつも通りだったが、確かにうつむきがちである。こうなると答えは一つ。

「お休み中でしたか……」

難点があるとすれば、晴燐は寝ているときがわかりにくい。寝ていると思えば起きているし、起きていると思えば寝ているときもある。

……かなり余談になるが、彼は実際六十八歳なのだ。

長寿の一族である安倍家に生まれた晴燐は、常人の何十分の一のスピードで成長する。見た目は二十歳そこそこでも、還暦などとつくに過ぎたおじいちゃんである。

そうして、これから何十年と生き続ける。年下の者を見送りながら、自分よりも年下なのに、自分ほどは長寿の血を受け継がなかった弟を見送りながら。

晴燐はメモリートとして、この特徴を利用した能力を持っているのだが、それはまた別の機会に話すことにしよう。

そういうわけで、これは青年のお休みタイムではなく、おじいちゃんのお休みタイム。老人は一度寝ると、なかなか起きてこないものだ。やたら朝は早いものだが。

「じゃあ、夕飯の後に来ようかな。それまで寝てたら起こさずくはそうつぶやくと、『月の間』を後にした。」

